

# 経済・金融 フラッシュ

## 貿易統計 11年7月 ～貿易収支(季節調整値)は4ヵ月連続の赤字

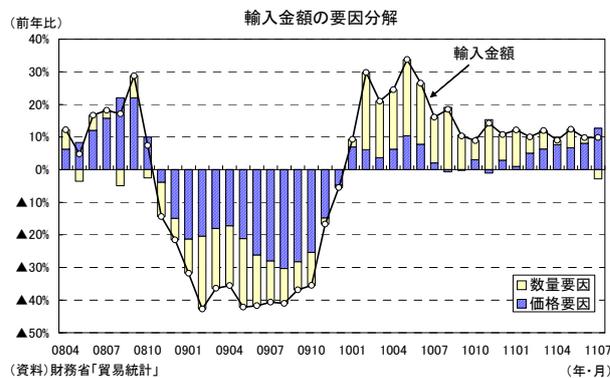
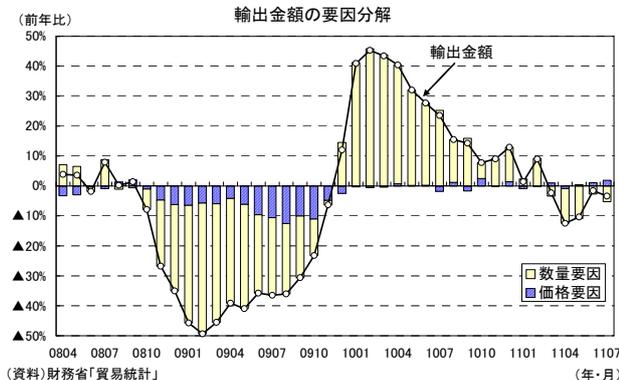
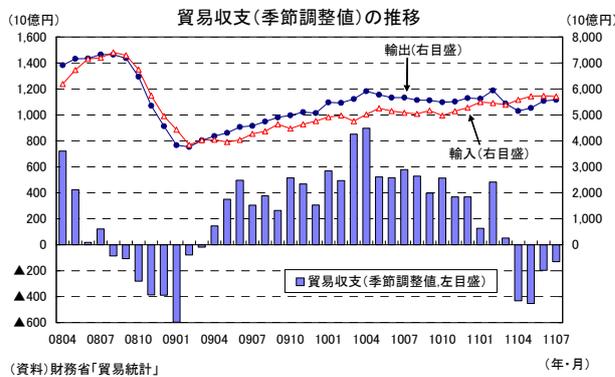
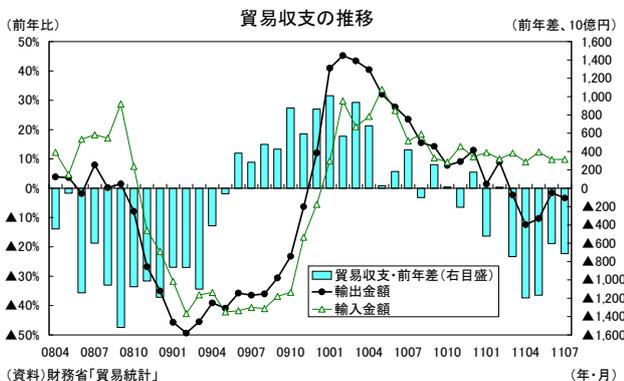
経済調査部門 主任研究員 齋藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

### 1. 貿易収支(季節調整値)は4ヵ月連続の赤字

財務省が8月18日に公表した貿易統計によると、7月の貿易収支は725億円の黒字となった。原数値の貿易収支は2ヵ月連続の黒字となり、ほぼ事前の市場予想（QUICK集計：701億円、当社予想は915億円）通りの結果であった。ただし、輸入の伸びが前年比9.9%（6月：同9.8%）と高止まりする一方、先月まで急ピッチで回復を続けてきた輸出は、前年比▲3.3%と前月の同▲1.6%からマイナス幅が拡大した。

貿易収支は原数値では2ヵ月連続の黒字となったが、貿易収支には季節性があるため、基調を判断するためには季節調整値を用いることが適切である。7月の貿易収支を季節調整値で見ると、▲1,305億円（6月は▲1,965億円の赤字）と4ヵ月連続の赤字となった。赤字幅は縮小傾向にあるものの、基調としては依然として貿易赤字が続いていると判断される。



輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比▲5.2%（6月：同▲2.7%）、輸出価格が前年比1.9%（6月：同1.1%）であった。輸入の内訳は、輸入数量が前年比▲2.6%（6月：同1.7%）、輸入価格が前年比12.8%（6月：同8.0%）であった。

## 2. 輸出の回復ペースは非常に緩慢となる公算

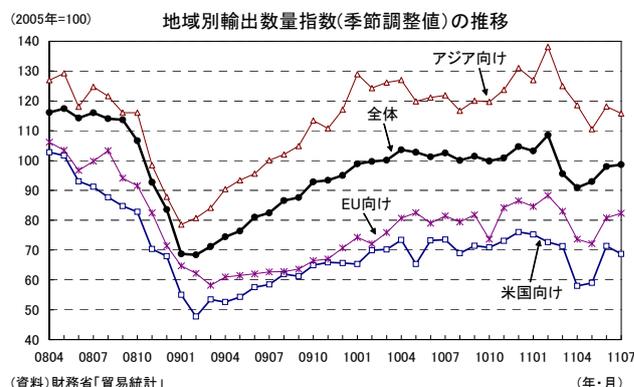
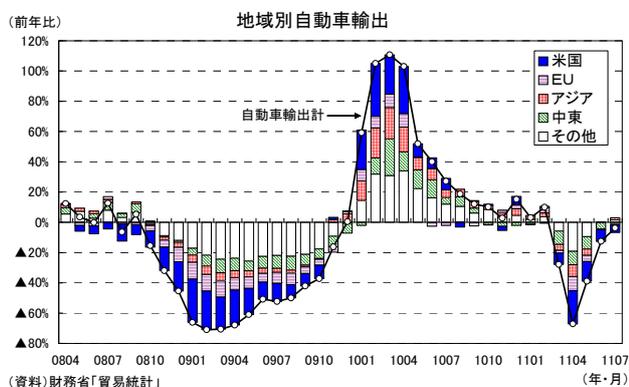
自動車輸出は前年比▲3.8%となり、6月の同▲12.5%から減少幅が大きく縮小した。EU向け（6月：前年比1.5%→7月：同▲5.7%）は減少に転じたが、米国向け（6月：前年比▲23.6%→7月：同▲14.4%）の減少幅が縮小し、アジア向け（6月：前年比▲2.3%→7月：同9.4%）は震災前の2月以来、5ヵ月ぶりの増加となった。国内の自動車生産の持ち直しを反映し、自動車輸出の水準もほぼ元に戻りつつある。

7月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比▲5.7%（6月：同▲2.5%）、EU向けが前年比1.8%（6月：同2.2%）、アジア向けが前年比▲4.5%（6月：同▲2.5%）であった。季節調整値（当研究所による試算値）では、米国向けが前月比▲3.7%、EU向けが同1.9%、アジア向けが同▲2.0%、全体では同0.7%となった。輸出数量指数（全体、季節調整値）は5月、6月に比べれば伸びは鈍化したものの、7月の水準は4-6月期の平均と比べれば10.7%も高い。

一方、7月の輸入数量指数（季節調整値）は前月比▲0.1%のほぼ横ばいとなり、7月の水準は4-6月期よりも▲1.8%低くなっている。

4-6月期のGDP統計では輸出が前期比▲4.9%と急速に落ち込み、外需寄与度は前期比▲0.8%の大幅マイナスとなった。7-9月期の輸出は高い発射台からスタートすることもあり、大幅な増加が見込まれる。4-6月期とは逆に外需が成長率を大きく押し上げる形となるだろう。

ただし、円高の急伸、米国をはじめとした海外経済の減速など、輸出を取り巻く環境はここにきて厳しさを増している。国内のサプライチェーン復旧に伴う急速なりバウンドの局面が終了しつつあることもあり、先行きの輸出の回復ペースは非常に緩慢なものにとどまる可能性が高い。貿易収支の赤字幅は縮小傾向を続けてきたが、はっきりとした黒字に転換するまでには時間を要するだろう。貿易収支は秋口以降もゼロ近傍の動きが続くことが予想される。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。